



「農の暮らし」(43)

～半農半Xで自給自足を目指して～ 高木政志さん



たかぎ
長野県喬木村 高木 政志さん

長野県で小学校の教員として勤めている高木さん。転勤を機に、村の空家を借りて、一家で自給自足を目指す生活を始められました。かねてからの夢だった、緑の山々と清流に囲まれた生活を、今回ご紹介いただきました。

●喬木村で暮らし始めて

私は高校生の時、高木さんの講演を聞いてショックを受けて以来、十数年、講演会やワークショップに参加し、人生が変わりました。現在は小学校の教師をしながら、半農半Xをしています。

実際に村での暮らしを始めて、まず心打たれたのは、村の人々の温かさです。みんなすごく親切で、道で会うと必ず声をかけてくれるし、野菜や果物や山菜をいつも分けてくれます。地元の子どもたちは誰にでも明るく挨拶し、地域みんな子どもを見ている感じです。そんな中なので、子育てもすごく安心です。うちの子がよその庭に入っても、「おう、来たかね」なんて言って温かく迎えてくれます。かつては車を心配して公園の遊具で遊んでいましたが、今はどこまでも

行けますし、家の周りにはトンボやカエル、トカゲ、小川にはオタマジャクシや小魚もいて、野原には草花があって、遊び相手に事欠きません。

自然体験を大事にする保育園に通って



いる長女は山菜とりが大好きで、山へ行けば袋いっぱいのワラビやコシアブラを採ってきます。休みの日には、「魚獲りに行こうよ」「たけのこ採りに行こうよ」など

とせがまれます。たくましく育ていることをうれしく思います。

●農業を始めて

そんな環境の中で、自給自足を目指して農業を始めました。1反ほどの畑をタダで借りることができ、芋、豆、トウモロコシ、それに一通りの野菜を作っています。私たちが畑いじりを始めると、「待ってました」という感じで近所の人が、野菜の作り方をあれこれ教えてくれたり、苗や種を分けてくれるようになりました。ありがたいことこの上なしです。さらに鶏を飼い始め、今は20羽ほどが元気に育っています。まだ卵を産み始めたばかりですが、ゆくゆくはもらった野菜のお返しに、みんなに新鮮な卵を食べてもらいたいと思っています。4カ年計画で、農作物の自給、肉や卵や乳の自給、燃料の自給などにチャレンジしていきます。

周辺の畑では、夫婦で農作業をされている姿をよく見かけますが、農業で生活していくにはそれなりの苦勞があると、近所の農家の方に聞きました。売するためには農薬を使わねばならず、その時はマスクをつけ、子どもを遠ざけ…。悲しい現実です。やはり、安心・安全のためには、自給自足が一番だと改めて感じます。



家族で農作業

●職場でも

小学校でも、食料の自給自足を目指す『自給教育』の実践をしています。学級で米、大豆、麦、そばなどの栽培に毎年挑戦し、昨年は大豆を育てて豆腐、味噌、きなこ、納豆などを作りました。今年は飼料用トウモロコシと鶏を育てています。こうした農業体験学習で、子どもたちはものすごく生き活きとしています。この姿を見たら誰でも「農業体験っていいな」と思うでしょう。その体験学習に環境教育を絡めて、「食料の自給は絶対に必要で、それは楽しいことだ」と子どもたちに教えています。以前受け持った学級では、子どもたちが本当に農業を好きになり、また食料問題に強い意識を持ってくれました。後でとったアンケートでは、3分の2以上の生徒が「将来、農業または半農で生活する」と答えてくれています。



自然の中で遊ぶ子どもたち

他の先生方にも『自給教育』が必要だと理解してほしいと、できる限り話をする機会を作っています。高木さんの講演を最初に聴いたときから、みんなが安心して暮らせる社会にしたいと、今も変わらず考えています。将来は、自給自足を学べる学校を作りたいと考えています。昔ながらの農法や自然農をできる、知恵ある人を育てられる、そんな田舎暮らしの拠点作りを目指しています。

●村に来てください

喬木村はとても豊かな田舎の村ですが、若い人が減って困っています。2007年の国交省の調査によりますと、65歳以上のお年寄りが半数を超える、いわゆる限界集落は全国に約8000あり、その内の2000以上の集落が消滅すると予測されています。村が1つ消滅するということは、そこで何百年と培われてきた、自然の中で暮らす知恵が失われるということです。それは、表す言葉が見つからないほど残念なことです。どうか、村に来て下さい。空き家対策事業などで移住者の受け入れ態勢をとっている自治体もたくさんありますよ。